

花石榴

花石榴

瀧
春一
句集

風
神
社
版



目次

昭和五十一年九月より	5
昭和五十二年	15
昭和五十三年	47
昭和五十四年	87
昭和五十五年	127
昭和五十六年	207
あとがき	237

句集

花石榴

装画・池上 浩
装帧・富田 直治

昭和五十一年九月より

炎天の老婆に無事を祝福され

長瀬映二郎を憶ふ

陽気にて淋しがり屋の梅雨仏

坑^し口^きの風さむし炎昼の道へ噴く

滴りに穿^{ほり}子^こ人形ぎくしやくと

夏さむき水替^か人形盲縞

掘り跡の狸穴てふ氷室めき

早稲の香や幽鬼の奈落のがれ出て

秋風や風呂場に溜まる屑シヤボン

唐招提寺

み明しはみ仏のみに月見寺

蠅はへとりくも虎
蠅も居らねばわびしげに

甲州葦川村 四句

家々をつなぎて露の石畳

道祖神祀る民宿十五夜花

茸蕙繭臭しとも思ひけり

蒟蒻畑茂らせ秋の山仕事

甲府積翠寺温泉

夜寒の肩こ古湯坊ぼの湯に叩かせる

ばつたんこ何を威すとなけれども

昭和五十二年

箸先に啄むごとし零余子の実

花のごとき鯉の洗ひや一葉忌

貸本屋の本がなつかし一葉忌

徳島

阿波十郎兵衛宅の藍甕葉鶏頭

粗朶垣に夕鶴一羽佇めり

冬の日の底に真鯉の深紫

湯豆腐や知命の子にも頼らるる

山梨市

枯葡萄棚に氷らぬ水奔り

房州洲崎

浪の群ひむがしへ馳せ冬日出づ

寒濤や那古観音は堂扉閉づ

前掛
けに
白鷹
の銘
大根
引

寒雀
頬の
白さは
汚れず
に

書初
や衰へ
ならで
枯れし
と言ふ

立春
の雉
鳩霜
を啄
めり

蜜柑山の暗緑を負ひ梅白し

萬華鏡幼なき雪の日も見ゆる

花の寺其角歌麿の墓を訪ふ

三月や勃然と芽はえびねらん

野遊びや熱き番茶に紙コップ

花冷やはんぺん箸で角に切る

巢立鳥子無き夫婦に餌づけられ

行く春やバス停は蘆花恒春園

五月朔日初花なりし時計草

螢火の思ひ出横瀬夜雨の村

常陸大宝村

拓農の大き溜池牛蛙

鳥曇百姓町の眼鏡店

春愁やテレビドラマの三鬼に逢ふ

相模湖正覚寺

遅桜白き僧衣と野良着干す

柏ニツカウイスキー工場二句

ウイスキー醸す林中青嵐

ウイスキー貯蔵庫寂と枝蛙

短夜や蕨浸せる片手鍋

石打たれうたれ水母は消えゆけり

時の日や時計の綽名に甘んじて

時の日や宛然として時計草

老人ホーム十薬などもコップに挿し

夏帯の老いうつくしや小倉遊亀

行水や昔々の大盥

夏山やはたけに水を撒く器械

瓜揉みや引窓のある臺所

慾も得もなしと極暑につぶやけり

谷中長久院

青銅のみほとけ熱し夾竹桃

八月や時の流れもやや疲れ

佃祭

松葉菊住吉大神の大幟

浜金谷

常山木咲く路地うねうねと漁師町

昨日炎天今日霧雨の木槿垣

走馬灯前世のものとなつかしむ

ししうどり花傘つらね秋立つ雨

秋風やどこへも行かぬ顔を剃る

敬老金もらひてひとりどぜう屋に

遠き日の思い出

奈良の旅籠の飯に太刀魚塩辛き

朝の汐蟹釣りの餌の鯨を釣る

相馬松川浦

青北風や焼魚にして浜みやげ

一と山の葡萄段畑天の川

まどかなる葡萄の果肉噛みしむる

鈴虫や人に飼はれし声ならず

青々と木につつまれて秋迎ふ

夜寒さや藁の匂ひの文庫本

屋久杉のぐい呑かるし温め酒

金子伊昔紅翁町葬

石 落 日 和 兜 太 が 被 る 喪 の 頭 巾

昭和五十三年

米
粒
の
や
う
に
さ
ら
さ
ら
地
の
霰

鉄
砲
洲
稻
荷
黄
落
は
じ
め
け
り

山茶花に夕日となりてまた射せり

返り花木枯一番にも遇ひぬ

冬の香や重湯に実なき大根汁
国立病院医療センターに入院 六句

床上の子規の身構へ年迎ふ

数へ日やあべ川餅も術后食

いのち延ぶることに必死や冬銀河

点滴の空き手に指しぬ冬筑波

病臭も消ゆる一顆の冬林檎

退院して

冬 董 し づ か に つ よ く 生 き る べ し

元 旦 の 燭 先 づ 献 ぐ 母 と 妻 へ

初 風 呂 や 腹 一 文 字 手 術 痕

手 が ふ た つ 小 さ く な り ぬ 雑 煮 椀

夕暮をたのしむといふ賀状かな

生きの身のあゆみはたぬし冬草道

冬の西日寒き書齋にきらびやか

お降りの庭木冬芽を確かむる

人間に鴨のくらしを見せに来る

大病の後もせつかち春寒き

はなやぎて二月の雨の枯柏

湯島

梅未だべつこう飴を舐めあるく

啓蟄や爺婆たちもひた駈くる

永き日や老衰といふ大往生

金貨のやうなつり銭が出る花曇

軍鶏に似し爺ども鶏を闘はす

みほとけも硝子の中に出開帳

顔に射す夕日のぬくみ梅の園

梅を見て人にかかりなく帰る

紫雲英田に貧血といふ身を横たへ

春寒や白き鯉のみ浮びくる

鬪鶏師とてあばら家に棲みにけり

貝寄風や帆立の貝の殻ばかり

花冷や屢々靴の踵踏まれ

螢烏賊の塩辛暗き壺にあり

眼の玉を種のごとに螢烏賊

昔話ばかりしてゐて野蒜つむ

哀れさや乞^ほ食^{いと}葱とも言ふ野蒜

啄木忌 インテリ臭を憎みけり

セメントの土手味気なや梅若忌

行道山 二句

放生金魚先住の鯉と直ぐなじむ

流麗にふしをたがへずみそさざい

行く春や人工渚浪音無し

緋牡丹の供華に青面多聞天

石段のある吾が門の薄暑かな

いつびきは駿馬のごとし水馬

猫が身をふかぶか沈め夏落葉

雷電さまの境内鯰料理かな

毎日が日曜靴の黴を拭く

猫も亦黴ざらんとて身を拭ける

鮎釣のまつたく暮るるまで一人

横浜

ふるさとや盆を祭らぬ異人墓

七夕や鳥威しより大袈裟に

水菓子の喰べ方下手で夏痩せず

日光 二句

霧降りの瀧みち蟬の降るごとく

竜頭の瀧岩肌に跳ね躍りつつ

握りめしの芯の山椒ひりりと秋

炎天の飛雪は白きさるすべり

吾妻橋

松葉牡丹一錢蒸氣発着所

花火待つ目に遙かなる稲光

昔も今も秋風の百花園

喜の字書きて人に贈りし秋扇

暗澹と厄日らしさや震災忌

俳人の青嵐市長震災忌

草相撲日のあるうちは子供ばかり

三役は沖仲仕とや草相撲

松虫や伽藍の塀の長き道

青蜜柑御殿場線は峽を行く

真つ青な揚羽の蛹露まみれ

玉石の堤笛吹川澄めり

草
虱
猫
に
た
か
ら
ぬ
も
の
ら
し
く

籬
よ
り
摘
み
し
と
云
へ
り
菊
脛

異
人
墓
は
石
の
明
る
さ
秋
の
暮

昭和五十四年

大豆
引く
媼
空
莢
嘆
き
つ
つ

大
い
な
る
鉄
鍋
を
賞
め
拔
菜
汁

画展にて酒もてなされ冬立つ日

廂なき家は無韻に初時雨

武蔵野の土となりたる波郷の忌

落葉踏む足すべらせて波郷の忌

波郷忌の女夫塚ともなりしかな

根深汁海の香よりも匂ひけり

牛臭きからたち垣の冬の暮

きな臭きほどの日当り大根干す

大いなる団地の端はの枯野駅

羽子板市やはり灯ともし頃がよき

寒椿午後から日向廻り出す

葱鮪鍋職人の家を継がざりし

笹子餅頬ばる媪山眠る

山国は眼の玉さむく繁華街

鳥が遺す実生いろいろ初筥

双六や上りは蜜柑落花生

初夢に見しふるさは明治の世

人日やアメ横の鐘は摩利支天

松過や銀座の辻の日のぬくみ

麦萌ゆる畝あつまりて遠筑波

探梅の思ひに近所あるきけり

塗盆にうぐひす餅の仄明り

武士の世は若者ばかり實朝忌

かははぎの皮を剥ぎをり實朝忌

初午や冷酒に鮎のすずめ焼

初午や隣は神変大菩薩

錢洗弁天

累卵を供へし神の麗かに

環八や春の夜更けの撒水車

風生の髭の温顔鳥曇

夕靄に沈み手賀沼ぬるみけり

藁塚のいつも影せり水温む

目の前にすとんと落ちし夕雲雀

煮びたしといふ小松菜の馳走かな

花曇失せもの駅へもらひに行く

駐車場よくぞひともと初桜

葉牡丹の古代紫莖立ちぬ

人影のなき花蔭に囀れり

春の夜やただ暗がりの桃の村

春昼や谷中のこる絵草紙屋

椅子に身を沈めて端居どころかな

美術館冷ゆる卯の花腐しかな

絶対に甘柿と言ふ苗木買ふ

鮭ほどの鯉幟吊る二階かな

母の単衣直してもらひ更衣

軽みとは哀しみのこと
縷紅草

花椎も花栗もまた
屍臭に似る

槐並木豆科の花を
そよがせて

シルバーシートは
ゆづり葉二枚
早梅雨

ひとり身の寝床西日に日々曝す

佃島哀しきふしの盆踊

積みられたる俳誌の上に涼む猫

昼顔皆中途半端な咲き方に

藤椅子や母のせしごと大欠伸

起し絵の狂言母がひとり知る

土用明け日めぐりぐつと痩せにけり

迎へ火は夕日に送り火は闇に

多佳子の忌憶えのありし男声

喰べる苺よりも真赤に蛇苺

閑迦そそぐ雨の洗ひてゐる墓に

河童忌やつめたき床ゆかにあつき素足

房州鹿野山 六句

夕立は透明の棒鎖樋

禅林の萩白のみやしだれずに

又手は胸に手を当つること秋の風

文殊菩薩の供華は葉ばかり爽かに

座禅の膝人蟄す秋の蠅が来る

止し静じょう中ちゆういつしか虫の夜となれり

夕風や漁舟は粹いきに浪を切る

球児みなくりくり坊主敗戦忌

針金で縛る七厘秋刀魚焼く

吾が世にはおろそかならず震災忌

熱くない西日の中に鳳仙花

鮎焼きし串が心棒木の实独楽

昭和五十五年

十月や赤い色紙を一枚買ふ

暮の秋老人パスとは素つ気なや

秋の蛞蝓猫のめし椀舐めにくる

烏瓜百歳婆のひびぐすり

夷講一本メは日本橋

谷中にてしかと新蕎麦啜りけり

甲州黒平くろへら 二句

民宿を営む
杣の紫蘇畑

露けさや黒平焼の鯉と龍

草虱より執拗に
みのかづち

秋の夜のテレビ
見るため蚊遣香

芸術祭山雀の芸昔ながら

伝法院の池をめぐりて嵐雪忌

枯園や枯れざる籬めぐらして

いささかも媚びぬ暗さに枇杷の花

鎌倉覺園寺 四句

冬紅葉百八やぐらの山を負ふ

黒地蔵黒く在はせり冬の雨

鞆阿弥陀時雨の後の日明りに

薬師三尊三顆の柿を献供せり

高橋忠弥郎 二句

笹鳴の冬ぬくければ初音せり

冬の日の画伯珈琲の豆を碾く

息災の身のうれしくて初観音

芹摘めば里人の目の胡散げに

しみじみと湯浴みの手足冷たかり

死に恥をさらすことなく寒明けぬ

シクラメン直ぐ甦る寒の水

大寒や蜂蜜の香はうまごやし

羽織下何んの毛皮かいとしかり

まぼろしの軍馬に冬のからすむぎ

褐色の日向の杉生麗かに

宮崎旅吟 六句

方円の古墳枯色紅梅咲く

黒貫寺

老梅や諸枝に乾らぶさるをがせ

青島

真砂みな貝殻なりし春渚

鶴戸神宮

春めくや双もろ乳ちの岩の滴れる

鰻の骨ぽりぽり喰ぶる梅見酒

初午や八百八町よりの路地

武蔵野の春一番に蘆花旧居

春暁やゴムの木の鉢抱へ出す

としよりの淫靡に花見踊かな

花 辛夷石切山のてつぺんに

まぶしさや桜吹雪に雪柳

岩陰に海女の出店の壺焼屋

壺焼の潮噴き出せる灰かぐら

汐吹きは捨てる貝なり汐干狩

九十九里浜の暮春の砂嵐

花札のやうに帰雁の坊主山

餅草のやうに豚草はびこれる

一
齊
に
水
田
ま
ぶ
し
や
目
借
時

検
眼
の
椅
子
に
農
婦
や
目
借
時

行
く
春
の
藁
屋
根
ば
か
り
見
て
あ
る
く

杉
枯
葉
著
莪
の
葉
群
に
春
の
雨

陽炎はだまりこくりて笑ひをり

八重桜春も束の間落ちつきぬ

晩春や見えしところに富士見えぬ

懶惰にて花も作れず立夏かな

編集室器まちまち鈴蘭挿す

緑蔭や鵜匠の庭のかたらひ句碑
岐
阜

椎の香や腕支へられ靴を穿く

水中花何んの花とも知れず咲く

金雀枝のほとりはしり蚊弱々し

金雀枝の金粉浴びて枝括る

どくだみを踏めば怒りの香を発す

硝子器に挿すどくだみは高貴な花

卯の花の径のはてなる瀧不動

いち は つ の 白 と 紫 黒 羅 漢

巖にのる鶺鴒を払ひのけ濤うてり

養殖の螢かぼそくともし過ぐ

螢火やのこる木の橋土の橋

かたばみのピンクの花の薄暑かな

妙義山

石門をくぐりゆきかひ夏燕

老どちの夏至夕暮を待つ会話

梅雨鴉飢えをつぶやく声ならむ

老鶯やホーホケキヨーにケキヨ足せり

つんつんと今年の篠の並みそろふ

よしきりや駐車を許す河川敷

耳遠き人も雪加を聞きしと云ふ

六月やただ青々と牡丹園

額に似て甘茶は更にやさしき花

朴咲くと見るや一と谷隔てゐて

吾が句碑に隣る簪塚涼し

青蓮の池を覆ひて暑さ来る

蚊遣香蚊の出る庭を誇りにて

灸花誰彼の顔思ひ出す

新ぢやがの小粒丸ごと吹き吹き食ふ

夕涼みあうらにしるき柁目踏み

初螢闇の青田の灰白き

盆の墓こぞの案山子も葬られ

水中花子役の樂屋にぎやかに

水中花なども盆供の中にある

盆過ぎの掃苔おのれひとりなる

谷中長久院

閻王の笑顔さびしき祭かな

震災忌観音さまに詣りけり

それからのあつといふ間や震災忌

木霰は雨より太し青楓

秋風や舟寄せ石にうづくまり

旧盆のきつねのかみそり群がれる

きつねのかみそり蒟蒻畑の下闇に

葛原や遠くに牛のかたまれる

がまずみの実の鮮紅に霧うごく

夏足袋といふものありし冷夏かな

猿蓑の匂も思ひ出されて

夏の月あつしあつしの声も無く

捨て畑の葛原となり秋の声

陶工の鉦は南瓜を叩き割る

零余子飯むしろ奢りの餉と思ふ

秋海棠花も葉色も若々し

吾が句碑の裾初花の糸すすき

みちのくの黄菊ばかりの菊枕

菊 枕 媪 の 針 の 縫 ひ 上 げ し

菊 枕 夢 は 花 野 を さ ま よ へ る

子 規 の 忌 や 老 人 健 診 異 状 な し

仲 見 世 を 出 て か ら 月 の 夜 と 知 り ぬ

橋の真ん中月夜の利根のど真ん中

家苞に一株で足る八つ頭

立ちどまり背筋のばして暮の秋

甲州にて 四句

兎飼ふ家々葛を刈り急ぐ

豆筵熱し存分日を吸ひて

待宵や青毬栗は高く活け

あららぎや青松虫の声さえざえ

釣舟草溝の腐臭に群がりて

町田・青柳寺 四句

懸額の拈華微笑も秋意かな

白檀の香の本堂の秋の冷え

施無畏殿めぐる野山の草の花

鶏頭やおん臀在はす観世音

陶匠の居間も土の香冷やかに

一と畝を縁者にのこす芋の秋

立冬や女にもらふ飴の玉

木枯や不作の柿をゆさぶれる

新海苔を買ひて香りを嗅ぐ仕ぐさ

行道山 二句

石仏の新入りもあり冬紅葉

冬の池春の放生金魚に逢ふ

初時雨郵便受の濡れずあり

美術館の傘立にわが時雨傘

疎けすけの籬の西日うすら寒

冬籠働く人を垣間見て

冬籠杖を引く日は気負ひけり

木
洩れ
日
の
水
玉
模
様
白
障
子

梟
の
声
の
真
上
が
月
の
道

冬
が
好す
き
と
い
ふ
倅
せ
な
女
達

父
の
居
る
子
連
れ
は
寧
し
冬
日
和

雪富士の見ゆる日は見ゆ道の涯

万太郎の句碑に似合ひて花柎

夕時雨もう真つ暗な二天門

釣宿のひそと冬菜を萌えしむる

枯葦に耳目ふさがれ
径ありぬ

つばなの絮ひかり
涯なき枯堤

笹鳴やセメント塗り
の崖の上

白富士に隣る
甲斐ヶ根雪曇

黄 鶴 鴿 冬 の 真 清 水 浴 び に 来 る

冬 至 の 日 消 え て 木 揺 れ の は た と 止 む

ク リ ス マ ス 母 の 忌 日 の 花 買 ひ に

昭和五十六年

元日やねぢ捲く時計まだありぬ

うすづける日をなつかしみ春を待つ

麦踏や地平に低き山うねる

日めぐりをめぐりて麦を踏みにゆく

雪解や湯宿の祀る子安神

木祖村や氷柱に芽ぐむ紅い爪

陶の村耕す畑も陶の色

アネモネや油のごとき夕日影

桃色にぬりつぶされて葡萄村

啓蟄やゴムのホースがとぐるまく

奔り来て意外にぬるき芹の水

初蝶と共に谷中の路地に入る

いきいきと老婆童女の遍路かな

山に入る赤装束や鳥曇

春塵を家に浴びせて富士風

生きものを飼はぬやすけさ菜種梅雨

新茶どき古茶熟年の味と言ふ

どうだんの芽のほぐれずに霞みけり

毛野の里夕日の色に霞みけり

行道山

観音供養めまどひをなつかしみ

看板は塩の一字や暮の春

花莖実生の松をとりかこみ

春愁やものの壊れるときは不意

かたくりの花は消えしや草若葉

葉牡丹の花は菜の花暮の春

博物の教師に具して薬狩

雨
蛙
鳴
い
て
風
神
雷
神
門

炎
天
や
編
み
穴
の
あ
る
べ
レ
ー
帽

民
宿
や
蜘蛛
の
巣
作
り
見
て
泊
る

美
し
き
身
を
罨
に
し
て
女
郎
蜘蛛

相模湖正覚寺

瀧
つ
つ
じ
一
点
の
朱
も
ま
じ
へ
ざ
る

裸
身
の
蓑
虫
吹
か
れ
き
て
薄
暑

う
る
し
櫛
花
も
み
ど
り
の
薄
暑
か
な

充
電
の
か
み
そ
り
灯
る
走
り
梅
雨

遠見ゆる白き節目や今年竹

鎌倉極楽寺

鴨脚草十大弟子は痩せ法師

虫どもの皆つるみゐて草いきれ

こまぎれに人に購はれて夏野原

虹
仰
ぎ
師
に
縋
る
心
い
つ
ま
で
も

父
の
日
や
老
い
の
兆
し
を
子
に
も
見
る

片
蔭
の
何
か
酸
つ
ぱ
き
家
並
か
な

片
蔭
の
長
屋
そ
れ
ぞ
れ
商
へ
る

蟻地獄古刹の紋の武田菱

炎天の大菩薩嶺指差せり

炎天や成程真日の炎えみたり

成田線木下

炎天や水は見えねど利根堤

炎
昼
や
雨
だ
れ
弾
き
の
三
味
の
音

炎
昼
や
つ
め
た
き
モ
ツ
を
串
に
刺
す

炎
昼
や
机
辺
の
冷
え
を
離
れ
ず
に

芳
香
の
電
気
蚊
取
器
闇
暑
し

印 結 ぶ 大 日 如 来 雲 の 峰

熱 風 に の る 蝶 沈 む 葦 の 花

鯉 の 池 葭 簀 を か け て 昼 深 し

七月十四日、秋櫻子先生を見舞ひて

師 の 手 支 ふ 汗 の た ま ゆ ら 忘 れ め や

あとがき

故水原秋櫻子先生は、句作に使われる一つの字、一つの言葉にも好き嫌いがはげしかった。選句の場合も、ご自分の嫌いな字や言葉を使った句は絶対に採られなかった。

私はこの先生のきびしさ、いっこくさが好きだった。自分が好き勝手な句を作っている、いつでも先生に見て貰えるという安心感があった。今までの私の句はいつも先生の眼を意識して作っていたように思われるのである。

秋櫻子先生のご逝去は、急に心の支えをうしない、がっくりとくずおれたような思いである。だが、私は心を取り直し、この機に、前句集『瑞牆』以後の作品を句

集にまとめることを思い立った。

句集の名は簡単につけた。私の今年「暖流」に発表する句の題名「石榴集」を持つてくることにした。私の庭に何年生きてきたか分らない石榴の樹がある。枝振りには立派だが、樹皮だけで中身はうつろのぼろぼろの老樹である。それでも、春になれば美しい錆朱色の芽を吹き、梅雨頃は火のように真赤な花をいっぱい咲かせるのである。秋には、十ほどの割合大きな実を生らせて、凄まじい老いの生命力を痛ましく感じさせる。

私は花だけの石榴であっていいと思う。

瀧 春 一

(昭和56年9月記)

句集 花石榴

昭和五十六年十二月二十日

定価二二〇〇円

著者 瀧 春 一

東京都世田谷区砦二―四一六

編集兼 富田 直 治

発行人 風 神 社

発行所 東京都練馬区羽沢三の二九 富田方
〒一七六 電話〇三(九九一)七五一六
振替東京 三一五二五二九
印刷・大洋印刷産業(株)

